経済論叢（京都大学）第193巻第1号，2019年2月

〈論　文〉

# チュルゴの「価値と貨幣」

黒　木　龍　三*

## Ⅰ　はじめに**

激動の18世紀フランスを駆け抜けたチュルゴ（Anne Robert Jacque Turgot, 1727–81）は，アダム・スミスの『国富論』を先取りした『富の形成と分配にかんする諸考察』（Turgot［1766］，以下『諸考察』と略記）の著者として，また近代のフランス政治経済学を代表する1人として有名であるだけでなく，未だ絶対王制下にあるフランスにおいて，徹底した自由主義的政策を実践しようとした財務総監，国務大臣としても特異な存在である。

18世紀フランスでは，すでに，生産と分配の理論，価値，金融，国際貿易，さらには公的権力による市場介入の是非などについて，幅広く議論されていた。そうした「政治経済学」を主導した「経済哲学（philosophie économique）」は「利己心」を人間の行動の中心に据え，また，正しい「理性」によって世界をより良い方向に変えることができる，としたフランス啓蒙主義に基礎付けられていた[1)]。この世紀を代表する経済学者として，他にもカンティロンやケネーを挙げることができるが，チュルゴの『諸考察』は，この時代のフランス経済学の集大成であり，最高傑作のひとつといえよう。筆者は，チュルゴの業績の概要については，すでに『諸考察』を中心に論じる機会を得たので（Kuroki, R.［2018］，黒木龍三［2018］），今回は，チュルゴの経済思想の最後の到達点であり，またその内容から，生産と分配のメカニズムを重視した『諸考察』とはやや異質とも捉えられる『価値と貨幣』（1769）を取り上げ，チュルゴの「貨幣観」と「価値観」について所見を提示したいと思う[2)]。

チュルゴは，未発刊で最後の重要な論稿の1つである『価値と貨幣』において，貨幣の役割や銀行券について詳細に論じ，価値については主観価値説の立場から独自の見解を展開している。彼は，Galiani や Graslin を読み，その上で彼自身の「交換の理論」を提示した。商品の交換は，各個人の主観的な価値付けによって基礎付けられるが，一方で，交換価値それ自体は，いかなる主観価値にも等しいとはいえない。市場で成立する交換価値（＝市場価格）は，人びとの主観的価値付けを平均したものとして現れる。そして交換行為は，少なくとも主観的な価値付けによって交換を行

---

＊　立教大学経済学部教授

＊＊本稿は，2018年度のヨーロッパ経済学史学会大会（於スペイン・マドリード大学）での報告内容を元にしている。また，日本学術振興会科学研究助成17K03646の支援を受けた。

1）Faccarello, F. and P. Steiner［2012］を参照。

2）本稿の論題を『』で括らなかったのは，チュルゴの貨幣観や価値観を論じるにあたって，検討の対象を『価値と貨幣』に必ずしも限定しなかったからである。

う人びとの動機に関わる限りでは，「等価交換」ではなく「不等価交換」として考察されるべきだとした。

## Ⅱ　資本形成と資本蓄積の手段としての貨幣の役割

チュルゴの貨幣観は，とりわけそのファイナンスの能力に照らして，従来から必ずしも明瞭ではない，とされてきた。1720年の「ローシステム」の崩壊は，当時のフランス社会において貨幣に対する幻想を見事なまでに打ち砕き，ジョン・ロー（John Law, 1671-1729）の押し進めた信用システムへの嫌悪感さえ醸成させたが，チュルゴもそうしたローへの反感という雰囲気から独立ではいられなかった。マーフィーが指摘するように，とりわけ代表作である『諸考察』で信用システムについての言及がほとんど見られないのは，「ローシステム」の崩壊のチュルゴに与えた影響があまりに大きかったためかもしれない[3)]。ローへの反発によって，チュルゴが金銀など商品貨幣に重きを置いたことから，彼を実物経済論者と見なしたとしても，それはあながち不思議ではない。しかしながらチュルゴ自身は，当時の社会がすでに貨幣経済として組織化され，貨幣は商品交換に不可欠で，さらにはそれが資本の蓄積に重要な役割を担っていることを十分に認識していた。

チュルゴは、「資本（capital）」という用語を，その正確な意味において最初に用いた経済学者の1人である。カンティロンも「資本」という用語を用いたが，ほとんどの場合，それは単に貨幣の貸付や債券を意味していた[4)]。チュルゴは資本と貨幣の関係，そして再生産のスタート地点への貨幣の還流に注目した。なぜならば、貨幣は資本の循環に不可欠な要素だからである。「チュルゴは「資本」なる用語を，すでに，「前貸し」のかわりに用いている。そしてさらに，より頻繁に工業家の前貸しを，借地農業者のそれと同一視している」（マルクス［1969］，第2巻第10章，p. 279, 注23）。ここでマルクスが工業者の前貸しを強調したのは，ケネーとの対比であることは明らかであろう（「前貸し」はケネーでは「前払い」に相当）。

## Ⅲ　貨　幣

### 1　「ローシステム」の崩壊

金融システム，あるいは銀行システムについてのチュルゴの見解は，必ずしも明らかではない。その理由の一部は上述したように，彼の心の奥底に深く刻まれたであろう，「ローシステム」の崩壊と，そのシステムそのものに対する嫌悪感にあると思われる。「ローシステム」の崩壊は，チュルゴが貨幣への幻想に気付き，貨幣とはそもそも何なのか，そして信用システムはどのように機能するのか，ということについて，真剣に考察するきっかけを与えた。

長期に渡ったルイ14世の治世（在位期間：1643-1715）が終焉を迎える頃，フランスの国家財政は対外戦争の莫大な出費でほとんど破産状態にあった。ちょうどそうした折，貨幣や銀行システム

---

3）マーフィーは，チュルゴは『諸考察』において一度も「銀行」や「信用」に言及していない点を強調する。Murphy［2009］，p. 134を参照。

4）たとえば，Cantillon［1997（1755）］，p. 113: ‘Si à l’expiration du terme de ses billets le prêteur d’argent redemande son capital’。またp. 114にも ‘Ces capitaux qu’on leur prête’ との記述が見られる。

の改革案を携えてジョン・ローがフランスにやってきた[5)]。ローは，財政の好転を狙うオルレアン公フィリップ2世（摂政在任期間：1715–23年）の目に留まって財務総監に任命され，王立銀行（Banque royale，後にBanque générale）を設立，フランスで最初に兌換を制限する紙幣の発行を試みた。彼は、富の源を「潤沢な貨幣」の存在と考えた。ローによれば，フランスの絶対王政の危機の原因の1つは貨幣の不足に認められる。彼にとって，金や銀など貴金属からなる貨幣ストックは，それが十分な速さで流通しないのであれば何の意味も持たず，それ自体としては何ら本質的な価値を持たない「紙幣」の方が，最大の流通速度を達成するには遥かに便利な装置であった。しかしながら周知のように，紙幣の過剰発行によって証券市場で惹き起こされた熱狂とバブルはやがて市場が弱気に転じることで崩壊し，ローの設立したルイジアナ・ミシシッピ会社（西インド会社）は破綻する。1720年の終わりには，紙幣さえもがその法貨としての地位を失った。

人びとは「貨幣の増刷は国富の増大に大いに寄与する」というローの思想の崩壊によって貨幣に対する幻想を打ち砕かれ，富とは実際何なのかについて真剣に考えるようになった。先にマーフィーによる指摘を紹介したように，チュルゴもまたローシステムに対する反発から免れることはできず，資本形成についての金融理論を完成するには至らなかったとする見解が通説である。

## 2 「紙幣についての書簡（Cicé 神父への書簡）」

チュルゴは1749年に書いた「Cicé 神父への書簡（通称「紙幣についての書簡」）」のなかですでにローシステムを議論し，紙幣システムの限界を指摘している。彼は直接にはTerrasson 神父の議論を取り上げたが，真のターゲットがローシステムであったことは明らかである。実際，彼は，ロー自身，自分の業績を十分に理解していたとは言い難い，とまで述べている（Turgot, 1749［1977］：p. 2）。チュルゴは，Terrasson 神父が，商人が自己資本の10倍の大きさの信用を得る可能性について言及することで支持した過剰借入（あるいは過剰貸付）について，そのような過剰借入は利子すら払えるはずもないとして批判した。信用の大きさは通常，借手の自己資本を超えてはならない。それが一覧払いの手形ならなおさらである。チュルゴは「信用」について次のように記す；

> 「商人がその信用によって作り出す利潤が，彼の手持ちの資金によって得られる利潤の10倍に相当するとしたら、それはひとえに彼の勤勉によるのである。商人がその手に渡る貨幣から利潤を生み出すことができるのは，その返済の厳守に自信があるからである」[6)]。

チュルゴが，利潤は通常，資本設備を操業することによってもたらされるものだと考えているなら，彼が，商人はその所有する貨幣や資産の10倍の手形を振り出すことができると結論づけることなど，まったく馬鹿げていると述べたことには十分納得がいく。彼は，カンティロンと同様，産業社会を前進させるためには企業家精神が必要なことを理解していた[7)]。

---

5）ローは1705年に『貨幣と商業』を執筆，金・銀からなる商品貨幣を批判し，土地を担保に紙幣を発行する「土地銀行論」を展開した。

6）Turgot［1749］，p. 2。

7）Turgot［1749］，p. 2で借手の企業家の勤勉さ（industry）を強調している。

チュルゴは，国家や国王の信用にまで言及している。Terrassonによれば，「すべての人びとは国王の手形を受け取る義務があり，その手形は貨幣のように流通するので，国王は，その約束だけで正当に支払ったことになる」[8)]。これに対してチュルゴは，Terrassonの考えは間違いで「明らかに幻想に過ぎない」[9)] と酷評している。

チュルゴは，通常の財と同じように，数量が増加すれば価格が下落する金の性質について，ローが無視したことは許し難いと非難する。紙幣はもちろんのこと金や銀にも，それ固有の本質的価値などは存在しない。それは常に商品の決められた数量に対応する。金の賦存量が多ければそれは安価になって，商品の一定の数量に対してより多くの金が充てがわれるのである。金の価値はその希少性にもとづく，とチュルゴは結論づけた。

チュルゴは言う；国王は確かに紙幣システムを構築できるだろうが，それは、彼の権力のすべてをもってしても容易なことではないであろう[10)]。もし国王が紙幣を増発するなら，彼はその価値を貶めることになるであろう。

> 「人びとは，銀の代理としてでなければ，すなわち，それに兌換できなければ，決して紙幣を受け取らないであろう」[11)]。

### 3　なぜ貨幣は貴金属でなければならないのか？

（貴金属であれ紙であれ）貨幣に押される王の刻印は「その重量と標準を認定するためだけのものである。諸々の商品との関係において，硬貨ではない銀も硬貨の銀も同じ価格を有し，したがって硬貨の法的価値は単に名目に過ぎない」[12)]。チュルゴは，ローを，王立銀行（Banque royale）を設立した時点でこの事実を無視したと非難した。

紙幣の数量は，商品としての金属の量の一定の割合に制約されるべきなのである。

### 4　『考察』における貨幣の定義について

チュルゴは，『考察』で貨幣と商品の関係について次のように述べている；

> 「あらゆる商品は貨幣としての２つの主な特徴を備えている。すなわち，すべての価値を測定し，表わすのである。そしてその意味において，商品はすべて貨幣なのである」[13)]。

金や銀が貨幣として最も優れている理由は，他の商品に比べて，分割しやすく，性質が不変で，容易に譲渡できるからである。そして彼はこう結論する；

---

8）Turgot［1749］，p. 3。
9）Turgot［1749］，p. 3。
10）Turgot［1749］，p. 4。
11）Turgot［1749］，p. 5。
12）Turgot［1749］，p. 4。
13）Turgot［1766］，p. 61。

「価値を測定したり，代表したりするのにそれら（金や銀…引用者）を使用するのがヨリ便利である」[14]。

貨幣のこれら２つの特徴は，（１）価値の尺度機能と，（２）交換手段に関わるものである。しかし，貨幣にはもう１つ，（３）価値の保蔵，という重要な機能がある。チュルゴはこの３番目の特徴，すなわち富の蓄積手段としての貨幣の役割を積極的に評価した[15]。

「貨幣があらゆる商品のなかで最も交換しやすく，苦労せずに最も容易に保蔵できるものであることが認められるやいなや，富を蓄積したいと望む者はみな，主として貨幣を求めるにちがいない」[16]。

ちなみに彼の貨幣による価値の保蔵機能についての積極的評価は，同時代のケネーが，貨幣に価値保蔵機能があるために，人びとはしばしば貨幣を流通から引き揚げ，それが商品市場から購買力を奪い，不況をもたらすと警鐘を鳴らしたのとは真逆であった。貨幣は，

「消費せられて，また不断に再生する富ではない。蓋し，貨幣は貨幣を産まないからである。…（貨幣が（引用者））流通外に退蔵されて，もはや富と富との交換の媒介をなさざれば，１国の富を永続的に維持する上に寄与せざるところの富となる。…（貨幣がより多く保蔵されれば（引用者））ますます多くの更新せざる富を生ぜしめ，国民をますます窮乏にするものである」[17]。

## 5　貯蓄と投資

貨幣の重要な役割の１つに，投資と貯蓄のリンクがある。貨幣が社会に導入されることで，剰余を新たな資本に変換する際の困難を克服できるようになった。剰余は生産者の生産物が販売された後に，貨幣の形態で現れる。マーフィーによれば，チュルゴには２つの投資行動が存在する。すなわち，（１）自己金融による投資と（２）借入による投資である（Murphy［2009］, p. 146）。しかしながらチュルゴの考えるモデルでは，実際には企業家の投資は自己金融に制約される。マーフィーは，チュルゴは『考察』の段階では，金融システムについての考察が不十分であったために，投資と貯蓄の間にいかなるリンクも見出せず，結局は，企業家は彼ら自身の貯蓄によって将来の投資のための資金を賄うほかないと考えた，としている。しかし，チュルゴは実際には借入による投資モデルにも言及しており，借入市場についても考察している。もし企業家が投資資金を必要とするなら，貸してくれる誰かを探すだろう。そして十分な貯蓄があるか余分な貨幣を持っている人物がそれを他人に貸したいと思っているなら，借手と貸手の間に「貨幣市場」が組織されるはずである。チュルゴは，まさに利子率こそが，貨幣市場で貯蓄と投資を繋ぐ役割を担っていることを十分に認識していた。彼は，利子率は，他の商品の価格と同じように，貨幣を含む動産一般の需要と供給に

14）Turgot［1766］, p. 63。
15）Faccarello and Steiner［2012］, p. 348。
16）Turgot［1766］, p. 65。
17）ケネー［1951］『農業王国の経済的統治の一般準則』第７および第13の註より。

よって決定されるに違いないと信じていた。

これに対して古典派の代表者の1人であるリカードゥやマルクスの見解はやや異なっている[18)]。彼らにとっては，資本設備を稼働させることで得られる利潤こそが利子をもたらすのであって，決してその逆ではない。マルクスは『資本論』の第3巻で次のように語る（引用者による抜粋）；

「利子は，貨幣資本の価値増殖を表現し，したがって，貨幣資本の代償として貸手に支払われる価格として現れる。…資本としての貨幣の価値は，貨幣としての価値（自体…引用者）によってではなく，それがその所有者のために生産する剰余価値量によって，規定されている。…利子率の「自然的な」率なるものは存在しない」（『資本論』第3巻第5編第21章 p. 38）。

「利子は，産業資本家によって貨幣資本家に支払われるべき，利潤中の一部分であるにすぎないから，利潤そのものが利子の最高限界として現われ，その場合には機能資本家に帰属する部分はゼロとなるであろう。（一方…引用者）利子の最低限界は全然規定されえないものである。利子はいかなる低さにも低下しうる。…「利子率は，（1）利潤率に，（2）総利潤が貸手と借手とのあいだに分割される比率に，かかっている」（『エコノミスト』1853年1月22日［89ページ］）。…利潤率の高さが資本主義的生産の発展に逆比例すること（…）から，1国における利子率の高低も，同じく産業的発展の高さに逆比例することになる。…利子（率）は一般的利潤率によって，調節される」（『資本論』第3巻第5編第22章 pp. 40-43）。

古典派やマルクスは，利潤率はその社会の発展度合いに応じた「自然的」利潤率なるものに制約され，社会の発展とともに資本蓄積が進めば利潤率は自ずと低下する，と考えた（特にマルクスにおける利潤率の傾向的低下法則）。そしてそのような性質を持つ自然的利潤率，すなわち平均である一般的利潤率の高さが利子率の上限を画する。これに対して，利子率と利潤率の関係についてのチュルゴの理解は彼らと同じではない。否，全く逆である。

「貸付け価格（利子率（引用者））とは…決して，借手が，その使用権を買い取る資本によって，手に入れたいと思う利潤にもとづくものではない。この価格（利子率（引用者））は，すべての商品の価格のように，…（貸付けの（引用者））供給と需要との均衡によって決められる」[19)]。

上に述べたように，彼によれば利子率は，資本として利用しうる貨幣（あるいは広く資産）の多寡，言い換えれば，貨幣の需給でその水準が決定される。社会で節約の機運が高まり，貨幣に対す

18）リカードゥは，資本設備を稼働させることで得られる利潤こそが利子をもたらすのであって，決してその逆ではない，と力説する。リカードゥ［1987］第21章より：「利子率は究極的かつ永続的には利潤率によって支配される（p. 121）」，「セー氏は利子率が利潤率に依存することを認めている。だが，それだからといって，利潤率が利子率に依存することにはならない。一方は原因であり，他方は結果であって，いかなる事情もそれらの位置を変更させることはできない（pp. 123-4）」。

19）Turgot［1766］，p. 77。

る需要に比べてその供給が増えれば，利子率は低下する。ここでチュルゴが，ただ単に市場に存在するストックとしての銀の多寡で利子率が左右されるのではないことを力説していることに注目するべきである。すなわち彼は，利子率の決定に与る資本を必ずしも貨幣に限定せず，生産・商業活動に投下される動産一般で良い，とかなり広く解釈する；

「利子の価格は直接的に借手の需要と貸手の供給の関係に依存する。そしてこの関係は，資本が貨幣として存在するにしても，あるいは商業においてある価値を有する・貨幣以外の物として存在するにしても，資本を形成するために収入と年生産物の節約によって蓄積された動産の富の量に主として依存する」[20]。

すなわち，利子率を決定するものは，貴金属に限定される必要は必ずしもないわけで，利子率は「資本を形成するために蓄積され保蔵された価値の量に関係」し，「これらの価値が金属であろうと他の物であろうと，その物が容易く貨幣に変えられるのでさえあれば，どうでもよい」（Turgot［1766］，p. 84）。ヨーロッパにおいて，国民の「節約の精神」は絶えずその資本の総額を増大させてきた[21]。

「貨幣利子（率）は数世紀来たえずヨーロッパにおいて低下したのであるから，このことから節約の精神の方が奢侈の精神より一般的であったと推断すべきである」[22]。

チュルゴは，利潤率が低下してきたから利子率も低下したのではなく，長期に渡って節約の精神が支配的であったために，資本として利用可能な貨幣が潤沢に存在し，それが低い利子率をもたらしたのだと主張したかったに違いない。低い利潤率が成立しうるとすれば，それは低い利子率の結果であって，その逆ではないのである。

## Ⅳ　チュルゴの貨幣観

チュルゴは『価値と貨幣』で，貨幣について５つの要点を挙げている；

（１）貨幣は，言語や物差しのように，一般的な共通の尺度になり得る。その形状は一見してさまざまであるが，共通の用語あるいは標準によって同一のものにすることができる。実際，さまざまな人びとの異なった尺度や異なった言語は，比較可能であり，通訳もできるだろう[23]。

（２）すべての国の通貨の共通用語（common term）は，貨幣が測ろうとするすべての商品の実際の価値である[24]。しかし「この価値はそれに相当する貨幣量によってのみ表わされるから，貨幣は他の貨幣によってのみ評価されると結論できる。それは，ある言語の音声が他の言語の音声によっ

20）Turgot［1766］，p. 84, paragraph 80 の見出しから。
21）Turgot［1766］，p. 84 を参照。
22）Turgot［1766］，p. 85。
23）Turgot［1769］，p. 133 を参照。
24）Turgot［1769］，p. 134。

てのみ説明されうるのと同じである」[25]。ここでのチュルゴの説明は，ミルクという商品の1リットルが150円で，またドル表示で1ドルなら，1ドルの価値は150円に等しい，という購買力平価説に等しい。それを異なる言語の翻訳可能性になぞらえているところが興味深い。

（3）すべての文明国の貨幣は同じような材料（＝貴金属）で作られる。したがってそれらは互いに交換可能である。

（4）貨幣には2つの側面がある。1つは「現実の貨幣（real money）」であり，「金属でできているエキュやルイやクラウンやギネアである」。もう1つは「仮想通貨（fictitious money）」で，その役割は「計算貨幣（money of account），あるいは価値尺度（numéraire）」と呼ばれるものである。チュルゴは，貨幣を比較したり交換するためには，さまざまな国の貨幣のこれら2つの特徴について知ることが重要であることを認識していた[26]。

（5） moneta から pecunia へ：本来の正しい意味での「貨幣」という言葉は，特定の重量があり標準になる金属片を指し，「現実の貨幣（monnaies réelles（= real money））」に対応する。ラテン語では，moneta にあたる。しかし，貨幣は価値の「尺度」であり「保証」でもある。チュルゴにとって実際，貨幣が何でできているかということは大した問題ではなかった。貝殻や家畜も古代社会では貨幣の役割を演じた。「信用状に紙幣という名が与えられるのはこの意味においてであり，それも貨幣である」[27]。純粋に抽象的な貨幣単位であり，チュルゴ自身論じている「銀行券（bank money）」や「計算貨幣」の特徴は，ラテン語の pecunia に当たる。

## V 交換の理論 ―― 効用，主観価値，交換価値 ――

チュルゴは，効用や希少性という概念にも精通しており，Galiani の『貨幣論』を読み，Graslin の主観的な効用理論も理解していた。本節では，チュルゴの価値と交換の理論について素描を試みよう。

（1） はじめに，チュルゴの価値付けについての考えが，いわゆる「個人主義」に根ざしたものであったことを明らかにしなければならない。かれは，価値という言葉について次のように説明する；

> 「われわれは，対象とされる物についてそれに内在する実際の質を見，それによってその物が有益かを判断する。価値という言葉はこの意味において，他人との交渉を一切有しない孤立した人間にも当てはまるだろう」[28]。

財の有用性についての順番付けは主観的であって，同時に，その利用可能性＝希少性に依存する。一方，ただ1つの物であっても，その一般的な有用性を問うことはできるという意味で価値があ

25）Turgot［1769］，p. 134。

26）［1769］，p. 134 を参照。

27）Turgot［1769］，p. 136。

28）Turgot［1769］，p. 137。選好体系は孤立した個人にも備わる，との指摘はダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』［1719］を想起させる。

る，と言えるかもしれないが，他の物の価値と比較されなければ，「この物は価値はあるが少しも評価されない」[29]。こうしてチュルゴは，財の効用の測定の前提として，複数の財のあいだでの「価値の比較」，すなわち選好順位というアイデアを導入した。諸々の環境や条件についての考慮によってウェイトづけされたり修正されたりする（他の財の賦存状態や豊かさの状態に依存する）選好順位にもとづいた価値づけはまだ孤立した個人についてであって，彼は，この価値を「尊重価値（valeur estimative（= esteem value））」と名付けた。「それ（尊重価値（引用者））は人びとが自分の欲するさまざまな対象物に付与する尊重の度合いの表現である」[30]。ここで，チュルゴが財の効用を評価するにあたってその希少性を重視していたことを強調しておきたい。水は，一般的な意味で価値（有用性）はあるが，その追加的な価値は，利用される水がすでに多ければ小さい（限界効用の逓減）。すなわち，水の限界効用はその賦存状態に依存し，かつ，他財の賦存状態にも影響されるのである。

（2） 次にチュルゴは，商業の発生，と名打って，検討範囲を，孤立した人間による価値付けの問題から，2人の人間を組み合わせた「交換の問題」に拡大する。彼は，財の交換は人びとがさまざまな財に付与する尊重価値の比率が異なることで実現する，と考えた。

（3） チュルゴにとって，交換は不等価交換である。ここで，チュルゴによる不等価交換のアイデアをまとめてみよう。いま市場に $A$ さんと $B$ さんがいて，彼らは2種類の異なった財，$a$ と $b$ を持っていると仮定しよう。以下で，$V_j^i$ は $i$ さん（$i=A$, or $B$）によって評価される第 $j$ 財（$j=a$, or $b$）の主観的な尊重価値を表わす。それぞれの財の市場価格を $P_a$，$P_b$ で表わすと，チュルゴにしたがえば，市場で次の関係が成立する；

$$\frac{V_b^A}{V_a^A}>\frac{P_b}{P_a}>\frac{V_b^B}{V_a^B}$$

第 $a$ 財と第 $b$ 財について，市場で相対価格，$\dfrac{P_b}{P_a}$ が成立しているとする。このとき $A$ さんにとって，追加1単位の $b$ 財と $a$ 財の尊重価値の比率は相対価格よりも高く，$B$ さんにとっては，その尊重価値の比率は相対価格よりも小さい。したがって $A$ さんは手持ちの財のうち，市場価格に比べて相対的に主観価値の低い $a$ 財を売ろうとし，$B$ さんは市場価格に比べて主観価値の低い $b$ 財を売ろうとする。

もちろん，両者の尊重価値の比が市場価格よりも低ければ，ともに第 $b$ 財を売りに出したいわけで，その場合は $b$ 財の市場で超過供給が発生し，その価格 $P_b$ は上記の式が再び成立して両者で交換が可能になるまで低下するだろう。このようにチュルゴは，市場で成立する交換価値（市場価格）と主観的な尊重価値との相違に基づいて交換が発生すると主張した。

チュルゴは，主観的な尊重価値は市場で成立する交換価値とは直接には何の関係も持たないと言明し，交換価値は客観的な価値である，とする。そして交換価値自体は，市場において人びとの主観価値のあいだのどこかで決まるであろう。

29）Turgot［1769］，p. 137。

30）Turgot［1769］，p. 139。

## Ⅵ 結びにかえて

われわれは，前半でチュルゴの貨幣理論を紹介し，後半でその交換理論を検討した。チュルゴは，ローのシステムを厳しく批判しながらも，決して貨幣を金や銀など貴金属に隷属などさせず，むしろ誠実な企業家精神にもとづく手形の発行や信用による銀行券の発行を積極的に認めた。一方，チュルゴは，交換は人びとの財についての主観的評価が異なることから発生することを突き止め，交換の必要条件を主観価値の比率と相対価格の相違に求めたのであった。

1880年代にエッジワースは，異なる人びとのあいだで起こる交換の様子を彼らの主観的な評価を描いた「ボックスダイアグラム」を使って見事に説明した。しかしチュルゴによる，人びとの主観的評価の相違に基づいた市場交換の可能性の発見は，さらに100年以上も昔に遡ることができるのである。

**［Turgot の原典］**

Turgot の原典については下記の Groenewegen［1977］を利用し，津田内匠訳［1962］を適宜参考にした。

Groenewegen, P. D.（edited and translated）［1977］*The Economics of A. R. J. Turgot*, Hague, Martinus Nijihoff.

津田内匠（訳）［1962］『チュルゴ経済学著作集』岩波書店。

**［参考文献］**

Cantillon, R.［1997（1755）］*Essai sur la nature du commerce en général,* Paris, Institut National D'Etudes Démographiques.（津田内匠訳『商業試論』名古屋大学出版会，1992年）

Faccarello, G. and P. Steiner［2012］'"Philosophie économique" and money in France, 1750-1776: The stakes of a transformation', *European Journal of the History of Economic Thought*, 19(3): 325-353.

Kuroki, R.［2018］'Turgot, A successor to Quesnay and a forerunner of Smith', in Kuroki and Ando（ed.）［2018］.

Kuroki, R. and U. Ando［2018］*The Foundations of Political Economy and Social Reform*: *Economy and Society in Eighteenth Century France*, London, Routledge.

黒木龍三［2018］「チュルゴの資本理論 ――差額地代と土地価格との関係で――」，『立教経済学研究』第71巻第3号。

マルクス［1969（1894）］向坂逸郎訳『資本論』第3巻，岩波書店。

Murphy, A.［2009］*The Genesis of Macroeconomics: New Ideas from Sir William Petty to Henry Thornton*, Oxford, Oxford University Press.

ケネー［1951］島津亮二・菱山泉訳『ケネー全集』，白水社。

リカードゥ［1987（1819）］羽鳥卓也・吉澤芳樹訳『経済学および課税の原理』，岩波書店。

Turgot, A. R. J.［1749］'Letter to l'abbé de Cicé, since then Bishop of Auxerre, on the Replacing of Money by Paper'. Also known as the 'Letter on Paper-Money', in Groenewegen［1977］.

――――［1766］*Reflections on the Formation and Distribution of Wealth,* in Groenewegen［1977］.

――――［1769］'Value and Money', in Groenewegen［1977］.